

[抜粋]

## 何故 沖繩人か

離島社同人 宮城島明

はじめに

- (1) 沖繩をめぐる国家の諸相
- (2) 沖繩にとって国境とは何を意味するのか
- (3) 沖繩闘争論の不毛性
- (4) 沖繩人プロレタリアートの核とは何か
- (5) 孤立無援の展望

発行所 離島社

年月日 1971年2月22日

—はじめに—

沖繩返還が、日米両帝国主義間の政治的課題として登場して以来、ここ沖繩をめぐる種々様々な方法・形態で、運動論が展開された。本土沖繩を問わず、いろんな階層の人達によって沖繩問題が論じられてきた。あるときは、〈復帰か独立か〉という二者択一的な方針が論点になりあるときは〈奪還か解放か〉という沖繩闘争論の戦略次元の問題となって展開され、またあるときは〈イモハダシか現状維持か〉という基地依存経済の生活基盤を中心軸として「沖繩人」どうし相対峙する。

けれども、ヤマト（日本・日本帝国主義）による72年沖繩返還政策が、沖繩社会再編、日米共同した基地管理体制として具体的に進行している現在、沖繩は、返還と復帰を同義語として止揚する「保守的」な人と、〈72年〉返還に否定的な意味あいを含め、〈反戦〉復帰というスローガンに「革新」「階級」性を見出す部分が、入り乱れながらもかろうじて独自の運動を展開している。

客観的には対立しているかのごとく映るこの二大潮流の現象は、本質的には、戦後20数年間の異民族支配、あるいは明治百年という枠内でしか沖繩を設定しえず、自己の立場を展開しえないという、本土、沖繩の歴史に規定されている点で、同質であり、同一である。

〈大和、琉球〉を貫く歴史空間が、沖繩を取り巻く世界階級情勢のどまんなかで、どう〈世界性〉を獲得し得るのかと問われているにもかかわらず、それを同一民族、同一国家という「日本」的範ちゅう、一時的な規模でしか返還過程の沖繩は展開しえていない。

日本復帰—祖国復帰—本土復帰—反戦復帰という形で展開されてきた復帰運動の思想性・階級性が一度たりとも点検され確立されなかったが故に、その政治的主張・内容は、ヤマト（日本・日本帝国主義）に対するオトシマエ論に集中し、大衆運動のエネルギーを自ら拡散せしめている。

その混迷している沖繩の状況は、ヤマトの人間が沖繩と関わる際の、〈琉球人〉〈沖繩人〉〈沖繩県民〉〈沖繩人民〉という語り方の変化、語る主体の混乱と相関関係にある。

かつて、日本民族の同質性を獲得する主体の限界地点が幾度となく指摘されつづけてき、“何故、沖繩プロレタリアートか”ということが、世界、「日本」の歴史、「沖繩人」の培ってきた歴史性の中で要請されているにもかかわらず、いままた敢て同質性を追求することに沖繩解放の展望を見

い出そうと喘いでいる。

〈復帰〉というスローガンに階級性を見い出そうともがいている。

沖縄の位置そのものの矛盾は、日本資本主義の発展段階に規定された矛盾であり、帝国主義間の矛盾であるにもかかわらず、それを〈復帰—真の日本の独立—日本革命〉または〈永続的復帰—日本革命〉という段階的、一国的革命のイメージでしか沖縄の位置を把握しえていない。

けれども、72年施政権返還にともない沖縄の矛盾は、資本主義国圏対「社会主義国圏」の矛盾として登場してくる。

それは、国境をめぐる利害対立という形で顕在化してくる。

NATO、SEATO、日米安保条約とつらなる様々な帝国主義同盟・侵略反革命同盟の戦略体制の再編成にともない、尖閣列島をめぐる領土権争いが、日本対中国の矛盾として激化する。

このようにして、沖縄の矛盾が、資本主義間の矛盾から世界的な階級関係の矛盾として拡大され、沖縄の位置が、より強固な帝国主義の戦略位置として再編成されかけている中で、沖縄解放への視点は、どういう内容で構築されなければならないかが、いま、〈思想的〉〈政治的〉〈階級的〉に問われており、その主体の確立が要請されている。

#### (1) 沖縄をめぐる国家の諸相

第二次世界大戦の戦後処理の問題として、ここ沖縄が米帝国主義の一元支配下におかれて以来、沖縄の矛盾は、資本主義の発展段階である日本帝国主義と米帝国主義間の矛盾、世界階級情勢に規定された反共軍事同盟の矛盾として、その戦略位置が拡大されてきた。

終戦当時、米帝国主義にとって沖縄の戦略位置は、敗北した日本帝国主義の再建・膨張を抑制する位置としてあった。

日本軍の抑圧支配から解放された沖縄の人間に、米軍が解放軍と映ったとき、沖縄にとっての国家とは、沖縄人みずから日本からの独立というイメージで展開され、琉球という国家が夢みられた。

それは、沖縄の矛盾が、日本軍国主義の矛盾であり、その矛盾から解放してくれたのが連合軍であると規定する人民解放軍のイメージである。

ところが、朝鮮戦争の勃発とともに、沖縄の戦略位置が中国大陸に向けられ、米帝の沖縄統治政策が武力による土地収奪、土地接収、基地の恒久的建設の開始・管理体制の強化という形で進展し、沖縄の位置が、日米両国の合意にもとづくサンフランシスコ平和条約により決定されるという日米両帝国主義の矛盾として展開されると、沖縄にとっての解放、沖縄にとっての国家とは、日本国憲法に統轄された日本国家がイメージされ、その日本国家にみずからを投入させる運動として自己を、沖縄を展開する。

思想的には、もともと「沖縄人」は日本人であり、日本人として、戦後民主主義の中で人間性回復のイデオロギーを確立すべきだという視点であり、そうであるが故に、米帝支配は異民族支配になり、ひめゆり部隊の悲劇は、日本民族の悲劇であるという一億総ザンゲの戦争責任論ですべてを語ってしまう。

政治的には、そのような思想性を武器にしながら復帰運動にすべての問題を包摂させ、あるべき日本国家を顕在化させる闘いとして沖縄を主張する。復帰というスローガンに階級性、民族性をもたせるが故に、統一と団結が強調され、真の日本の独立という一国的な闘いを軸にするという方針が提起される。

もし、復帰運動に階級性を見いだすならば、それは、日米帝国主義の矛盾としてある沖縄の位置そのものを揺がす戦いがあった時期であろう。たとえば、それは、日米帝国主義の沖縄統治政策に否定的な確信をもった三大選挙の際の屋良「革新」主席誕生の時であり、65年の北爆からB52常駐化にともなう反戦復帰闘争であり、米帝の基地管理体系ともろに衝突する全軍労働争である。

米帝の一元支配を追認していた段階の日本資本主義に対して復帰を掲げること自体、有効性を持ちえたけれども、それは、日本帝国主義の政治力量に左右される一国資本主義の発展段階に規定されたものでしかない。逆にいうならば、日本に対する沖縄の復帰運動は、日本民族・日本国家を自ら規定する方向性でのみ闘いの質は存在し得たのであるといえるであろう。

60年安保による反革命同盟の戦略体制が確立される時、沖縄の復帰運動は極めて高度の政治性を獲得しえたにもかかわらず運動体としては展開しえなかった。

日米安全保障条約の戦略的中心環が、ここ沖縄基地の拡大再編強化という形で展開された事実を見抜けていたならば、日本、沖縄を問わず60年安保闘争は政治的には敗北しても、思想的には、より自立する核を世界的地平にまで押し上げ、獲得するものとして構築しえたであろう。

60年安保の思想的敗北以降、「日本」の運動体は極めて政治主義的に展開されていく。〈本土・沖縄〉の統一と団結が強調され、「日本的」なレベルでしか沖縄問題はかたられず、国家の解放より、国民の結合、国民としての解放をめざす闘いへと進展する。そういう状況下において、沖縄では復帰協を構成するさまざまな運動体が次々に形成されてくる。安保闘争の敗北から、平和憲法擁護の運動へと、民主化獲得のスローガンが中心軸となって、27度線を越える統一した闘いが「日本的」闘いとして沖縄から北上した。

このようにして、沖縄・本土を統一した形での日本革命のイメージは、まずなによりも日本国民としての結合軸を闘い抜く中から真の日本国民を形成し、それに勝利してのち、初めて日本国家権力を打倒する、日本革命の展望を切り開くという段階的革命論のイメージとして理論化された。

即時無条件全面返還路線が、より革新性を持ちえたのは、沖縄の位置が日米両帝国主義の共同した条件づけの矛盾として存在しているからであり、沖縄の解放を無条件的に追求したからである。けれども、即時無条件が思想的な軸になりえても、政治的なスローガンにはなりえない。何故ならば、沖縄を規定している諸要因を打倒するスローガンを提起しえないかぎり、返還とは、施政権が、米帝国主義者から日本国家権力に移行するだけの意味しか有しないのであり、沖縄の矛盾を根底から揺さぶる方針なくして、幾ら復帰に〈革新性〉〈革命性〉を見い出しても、それは、一国的なものでしかなく、世界階級情勢から取り残されるのが積の山である。

72年返還が日米共同声明で合意に達した時、復帰そのものの思想性・政治性がいとも簡単に崩れ去り、復帰運動そのものの歴史的・現在の総括が早急に要請されたにもかかわらず、〈反戦復帰〉〈完全復帰〉という修飾語を並べたて、沖縄が本土に復帰するのではなく、むしろ、本土が沖縄に復帰すべきだなどと、沖縄問題を論じている。

これから、復帰というスローガンにもし、〈階級性〉〈革命性〉を見い出すならば、それは、〈アジア復帰〉〈世界復帰〉でなければならない。

本土復帰を掲げる新左翼の方針なども、極めて、一国革命論といわざるを得ない。国境を越える闘い云々といいながら実はきわめて一国主義的な闘いであり、むしろ、日本国民を形成する、日本国家権力を顕在化させる役割しか演じていない。それは丁度、日本国家権力が沖縄問題を日本国家の国境の問題として位置づけており、そのための日本人イデオロギー政策による中央集権化攻撃と

うまく符合する。

沖縄における闘いの質とは、ヤマト（日本・日本国家権力）を相対化・顕在化させる闘いと、沖縄を規定する日米両帝国主義間の権力を打倒する闘いを同時に展開しうる内容を有しなければならない。もし、本土復帰を永続的に掲げることでヤマト（日本・日本国家権力）を相対化・顕在化できるならば、72年沖縄返還政策粉碎ではなく、それは、72年沖縄返還粉碎でなければならない。ヤマトを絶えず拒否することで、相対化しなければならないし、即時無条件に否定しなければならないはずである。自からを、非国民として永続的に顕在化させなければ、決して〈世界性〉など獲得できはしない。

日本人・日本国民という概念を突き崩す闘いとして、沖縄解放闘争の質があるんだということを欠落させるならば、〈本土・沖縄〉を貫ぬく沖縄闘争は一国的・民族的な排外主義の闘争へと墮落する質しか生み出しはしないであろうし、〈本土・沖縄〉を貫ぬく闘争の主体として位置づけられている「日本プロレタリアート」を普遍的なプロレタリアートとしての概念に止揚する闘いとして、〈沖縄人プロレタリアート〉を対置しなければならない。

何故ならば、この間の沖縄の闘いは、日本プロレタリアートの闘いという風に自己を鍛え、培ってきたけれども、それはむしろ、日本プロレタリア独裁の段階に至りつくものとして展開されており、それから日本プロレタリアートとして世界プロレタリア独裁をめざす闘いとしてしかイメージしえていないからである。

文字通り、沖縄人プロレタリアートとは、日本人・日本プロレタリアートとしての概念を〈世界人・世界プロレタリアート〉としての地平に永続的に押し上げる質として存在するのであり、〈沖縄プロレタリア+本土プロレタリア=日本プロレタリア〉という風に展開される存在ではない。沖縄人プロレタリアートの闘いという形で展開すれば、おそらく、左翼・新左翼を問わず沖縄人民による沖縄独立論をイメージするであろう。〈復帰か独立か〉〈奪還か解放か〉という範ちゅうで沖縄の位置を捉えれば、復帰に対して当然〈独立〉である。けれども、問題は、沖縄の矛盾が日本帝国主義一国の矛盾ではなく、日米両帝国主義の矛盾として存在するということにある。沖縄解放闘争の解放というイメージが、一国的な矛盾からの解放ではなく、世界階級情勢の矛盾からの解放でなければならないというところに、沖縄解放の意義づけ方と、沖縄問題をめぐるさまざまな混乱がある。

そういう意味で、独立とはヤマトに対する思想的な独立でしかない。

〈復帰でも独立でも〉なく、また〈奪還でも解放でも〉ないところに沖縄解放闘争は存在するのである。

そのことを理解できない〈左翼〉は全て、沖縄人プロレタリアートにとって反動的であり、〈確信〉の名の下に沖縄の矛盾をインペイする運動は、すべて反革命でさえある。沖縄の矛盾を日本国家の議会において〈革命的議員〉なる者でもって展開したところで何ら獲得されるべきものはない。国政参加選挙がそうであり、参議院全国区に新左翼が登場し、「リープクネヒト」として沖縄問題を展開したところで、沖縄解放闘争とは無縁の所で存在する者でしかない。沖縄の矛盾を議会制民主主義の範囲でとらえることが出来るかのごとく幻想をふりまくこと程、反動的なことではない。

沖縄をめぐる国家の諸形態を大別すれば、2通りに解明できる。それは、政治権力としての米軍基地権力であり、国家権力としての潜在的な日本国家権力である。そして、72年返還過程で明らかになるのは、施政権返還にともない潜在的な日本国家権力が顕在化することであり、沖縄支配の帝国主義体制が確立されることである。従来の形態から、国家権力が日本となり、政治権力が日米

共同した軍事基地権力になるというだけの話しであり、それを、沖縄の位置の矛盾が、日本帝国主義一国の矛盾になると考えるのは間違いである。それは、日米帝国主義間の合意の下に沖縄が決定されているからであり、資本主義の発展段階としてある日本帝国主義が共存できる体制として、今日の日米両帝国主義が存在し得るからである。

歴史的に見ても、沖縄は絶えず外部の国家群によって決定されてきており、一国的な矛盾として、沖縄の悲劇を語ることはできない。

そうした状況下で蓄積されてきた「沖縄人」の精神構造の中には、絶えずある国家にみずからを投入させないと存在しえないという意識があり、それがたとえば、薩摩の圧制に対し、清（大陸）帰属論を展開する頑固党が存在したり、現在では、日本独占資本の進出に危機感をいだく地域ブルジョワジー達が構成する“沖縄を明るくする沖縄人の会”という米資本に依拠し展望を見い出す論理がでてくる。けれども、そのような論理も結局は、〈復帰か独立か〉という範ちゅうでしか沖縄を展開しえないという没階級的なものでしかない。

## (2) 沖縄にとって国境とは何を意味するのか

[中略]

日本帝国主義にとって国境とは侵略の為の統合軸としての日本人を鼓舞する排外主義イデオロギーを確立するものとして存在するのであり、確立させる為に沖縄を奪還するのである。国境を越える為に闘われていたはずの階級闘争が、実は「日本」の国境を設定する為に、戦後二十数年間闘ってきたというところにいきついたのが本土復帰運動であり、七二年返還を「勝ち取った」運動の質にほかならない。

いま、尖閣列島の領土権をめぐるイデオロギー交錯が国境線の問題とからみあって、様々な階層の人達によって展開されている。石油資源の利害対立をめぐる左、右を問わず民族イデオロギーを媒介にしながら、〈民族〉的対立へと転化しようとしている。復帰運動の中心核として頑張った教職員の中に尖閣列島は日本のものであり、日本の領土である、と自から日本国家を前面におし出し、日本国民を武器にしながら主張している。日本帝国主義も尖閣列島の問題を日本領土の問題として展開する一方、反共軍事同盟の結集軸として戦略再編をいそいでいる。

「社会主義国圏」が尖閣列島の領土権を主張して以来、沖縄をめぐる国境の問題は、アジア階級情勢の矛盾、現代世界の矛盾として、「社会主義国圏」対帝国主義反革命同盟の緊張関係へと拡大している。韓国、台湾、日本の三国が三国連絡委員会を結成させ、資本主義対〈社会主義〉の階級利害の対立へと進化されており、その主導権を日米両帝国主義が握っている。

この日本の国境線と位置づけられている尖閣列島の問題が、反革命同盟の軍事路線となり、日本帝国主義の帝国主義イデオロギーの構成要因となって展開されているのが、72年返還過程にともなう沖縄での状況である。

はたして、沖縄において国境とは何を意味するであろうか。沖縄階級闘争において国境の問題はどう展開されなければならないであろうか。

文字通りそれは、国境を問題とする帝国主義返還・一体化政策と思想的・現実的に対決する以外展望はない。

沖縄人プロレタリアートにとって〈祖国〉とか〈国境〉はないのであり、国境を政治的に規定する帝国主義の反革命同盟の解体、祖国を規定する民族主義の打倒なくして沖縄解放闘争はあり得ないのである。また、「沖縄人」みずから日本国家を規定しなければ生存しえなかった状況下で培われてきた精神構造は、実は、一国的な矛盾ではなく世界的な矛盾であり、その世界矛盾を階級的に解明することなくして、沖縄階級闘争はありえないのである。

国家と民族を規定する方向から沖縄問題を展開することは極めてナンセンスであり、帝国主義の論理にしかない。日本国家と日本民族の幻想性を掘り崩すものとして沖縄問題が存在するのであって、日本国家・日本民族を顕在化させる為にのみ沖縄問題を論じてはならない。

かつて、〈沖縄人〉の海洋性が、沖縄をしてアジア海邦民族の名にふさわしい生活圏を有していたにもかかわらず、神の国、天皇の臣民という天皇制イデオロギーが注入されて以来、沖縄の悲劇史と呼ばれるものが始まる。この天皇制イデオロギーを思想的・政治的に打倒しえないかぎり、いくら国境を乗り越えた闘いを組み得たと自負したところで、それは、日本人としての闘いでしかない。天皇陛下バンザイが日本人民バンザイに転化するだけの話しである。

[中略]

#### (4) 沖縄人（ウチナーンチュ）プロレタリアートの核とは何か

沖縄の闘いが、復帰運動という形態にあらゆる矛盾を解決する闘争軸として集約され続けて以降、沖縄問題は日本人の問題であり、それは真の日本の独立以外あり得ないという日本革命に至る重要環として、主に社会党・共産党の人達によって闘われ、社共の武器として対日本国家権力打倒の戦術に使用されてきた。沖縄がサンフランシスコ条約によって米軍に売り渡されたが故に、沖縄問題は日本国家権力の不当性の問題であり、その不当性を追求すれば沖縄問題は解決されるかの如く幻想をふりまいてきたのが、この間の沖縄闘争の政治的内容に他ならない。沖縄問題が戦術の問題として展開されたが故に、政治力学的に膨張してきた日本帝国主義による 72 年沖縄返還政策に対し、ペテン的であるとか、超反動的である云々と泣き言を並べ、より統一と団結を強めなければならないと自己の政治的墮落を正当化する方向へと転落している。戦術問題としての沖縄闘争論がはたした内容は何をかくそう、〈沖縄・本土〉を貫なる天皇制イデオロギーを統一と団結の名の下に助長したにすぎない。

[中略]

沖縄問題は、世界革命の戦略問題であり、そうであるが故に、日米両帝国主義を打倒する主体として沖縄プロレタリアートが存在するのである。それは文字通り、世界革命なくして沖縄人民の解放はあり得ないのであり、それを日本性の地平に高め、共に日本革命を目指す闘う主体（沖縄プロレタリア+本土プロレタリア=日本プロレタリアート）として展開したところで、民族排外主義、ブルジョワ民族主義の落とし穴がまちかまえているにすぎず、その落とし穴をとびこえたつもりが実はその穴が拡大していたというのに気づくのが関の山である。〈沖縄・本土〉を貫ぬく歴史の中で、今問われているのは、日本性獲得の質ではなく、世界性獲得の質であり、又その核が沖縄に存在しているのである。

日本国家が形成されてくる過程で、沖縄の位置は絶えず一サイクルおくれであり、一サイクルおくれられたが為に日本史なるものが展開されてきたという歴史的事実を解明しえる革命家はいない。もし沖縄史ということが展開されるならば、それは日本史と世界史の中間に位置づけなければならないであろう。日本人という概念が形成されてくるのと同時に沖縄人という概念が形成されてきたことをふまえなければならない。沖縄において沖縄人という概念が形成されてくる際の対称軸に大和人（ヤマトウンチュ）という名称が用いられたことも把握しなければならない。

沖縄人という言葉は日本人として日本国家を形成してきた歴史を見事に解明する名称であり、日本民族の誇りがいかに馬鹿げたものであるのかを暴露する民族的武器である。あるときは〈日本人〉になり、あるときは〈琉球人〉にされてきた沖縄の歴史の中で日本を相対化する名称として、この沖縄人が存在してきたのである。

日本国家権力を打倒する主体は日本国民、日本人が、という形で民族問題を展開してはならない。〈沖縄人+本土人〉=日本人とか〈沖縄プロレタリアート+本土プロレタリア〉=日本プロレタリアートという図式を導いてはならない。それは、沖縄人+日本人=世界人、沖縄人プロレタリアート+日本プロレタリアート⇒世界プロレタリアートという形で展開しなければならない。沖縄人プロレタリアートの闘いにとって、民族とは、勝ち取っていくものであり、もともと沖縄人も日本民族の一員であるから、日本民族の解放を目指して闘わなければならないという論理は、没階級の論理以外の何ものでもない。

沖縄プロレタリアートの獲得すべき民族性とは〈世界民族〉にほかならない。日本人という概念が解体されつくすまで、沖縄人プロレタリアートは存在するのであり、日帝が日本国民として包摂したところでますます、沖縄プロレタリアートは、その階級性・民族性を発揮するものとして自己の存在を普遍的な〈プロレタリアート〉へと止揚するのである。

沖縄が本土に復帰するのでもなく、本土が沖縄に復帰するものでもなく、あるべき日本に両者が復帰するのである、というこの論理は一見、普遍的な命題のように映るが、実は極めて没階級的である。何故なら、それは、沖縄の解放を一国的な展望として展開しているからであり、それは、沖縄が本土に復帰するのでもなく、本土が沖縄に復帰するのでもなく、あるべきアジア、あるべき世界に復帰しなければならないという風に論理化されなければならないからである。

〈本土・沖縄〉を貫ぬく民族問題は、アジア民族、世界民族の範ちゅうで問われているのであり、あるべき日本民族云々という形で問われているのではない。あるべき日本民族は世界革命が勝利することなくして展開されるものではないのであって、世界性を獲得することなくして民族問題は展開されない。

ベトナム民族解放闘争が民族性を持ち得るのは、米帝を中軸とする反革命同盟に対する闘いで世界性を獲得しているからであり、あるべき民族とは世界性を有しなければならない。

日本民族にとって、天皇制イデオロギーを打倒し得ない限り、日帝打倒どころか、民族排外主義の大日本帝国が、またまた登場し、天皇制を頂点とする大日本民族のどす黒い血がベトナム人民に向かって吹き出すにちがいない。沖縄人とは、まさにこのようなものとして存在する日本人、日本民族を告発し、国家に規定されている国民を分解する武器として世界に存在しているのである。日本国民としての存在がいかに、排外主義として在日アジア人民の目の前でかたまっているかが、入管法再上程をめぐる政治状況の中で露呈されている。その在日アジア人民の告発を前にして、多くの闘う日本人が言語障害に陥り、総ざんげするという構造が70年代階級闘争の特徴的な傾向であ

り、その政治的・歴史的本質問題を無条件防衛、支持という主体性抜き論争へと自己を正当化し、天皇制イデオロギーの問題を思想的に総括したのみでなら政治的には解明していない。

日本国家としての日本人が何故日本人たり得るのかを自己と国家・国民との緊張関係においてどうアジアを射程に組み込む政治的内容として展開されるのかが、突きつけられている状況下において、即、コスモポリタンの時間と空間を語る思考がさも、インターナショナリズムとしての政治的内容だというふうに位置づけられ、戦争責任の問題を論理一般の問題に解消する傾向が、二十数年経過した現在でも存続している。それは同時に、戦争責任の問題が、ここ沖縄においても、思想的・政治的に展開されなければならない訳だけでも、どのような主体として総括しなければならないかが、実は、〈日本対沖縄〉〈沖縄対アジア〉の関係として問われている。〈沖縄対日本〉の関係で云えば被害者意識が優先し、〈沖縄対アジア〉の関係で云えば加害者意識が優先する。その関係は戦後も一貫して同様であり、日本人と「沖縄人」が二重、三重の矛盾として共存する歴史の中に沖縄の戦争責任の基盤が存在するのである。この二重三重の構造を解明するためには、日本人として自らを投入させた基盤、すなわちヤマトウ（日本・日本国家権力）を相対〔化〕することによって、その裏返しであるところの「沖縄人」を顕在化させなければならない。そうすることによって初めて、沖縄人プロレタリアートにとって戦争とは何であり、アジア人民にとっての沖縄プロレタリアートが、どういう形で自己のアジア性を獲得するのかが明確になる。

沖縄問題がアジアの矛盾であるということを欠落させ、日本、沖縄の関係でのみ展開されるならば、それは醜い日本人という形で沖縄の矛盾を日本の矛盾にのみ規定し、「沖縄人」の存在を隠ぺいすることになる。

沖縄人プロレタリアートとは、今日まで蓄積されてきている日本人、「沖縄人」の相共存する構造を、思想的、政治的に破碎するものとして位置づけられるのである。

〈ヤマトウンチュに負けるな〉云々と主張する言葉は全て「沖縄人」の言葉であり、沖縄の解放闘争の主体とは無縁な存在の人達である。このような言葉は、沖縄エゴイズムであり、本土エゴイズムに対置したところでの内容でしかない。

沖縄人プロレタリアートは、日本の国家、国民を、日本民族の名においても相対化しえるが故に、非国家としての非国民たり得るのである。それはまた当然、弁証法的に永続的な闘いでもって展開されなければならないし、沖縄の思想とは、そのような形でしか構築しえないのである。沖縄の位置とは帝国主義にとっての戦略位置だからこそ、たえず過渡期であり、その過渡期の状況を相対化する作業を放棄するならば、「日本的」「沖縄的」ナショナリズムか、それと相関関係であるところのコスモポリタニズムしか生み出しはしない。返還過程の今日、日本独占資本に利害の一致を見出す「日本派」と基地依存経済に依拠する親米的「沖縄派」、日米独占資本と対決し真の日本の独立をめざす一国的「日本革命派」が対立しながら独自の思想を政治主義的に展開している。

沖縄人プロレタリアートの戦いとはそれ一切のものと思想的・政治的に対立する中から確立されるのであり、その事は必然的に普遍的なアジア性、世界性を獲得するのである。

[中略]

〈沖縄人プロレタリアートは世界革命に向けて自己を垂直に飛翔させなければならない。〉